



ルポ

## 文化財建築を支える職人を称え 工芸美術の技を次世代に「つたえる」

(写真提供:株式会社植野石膏模型製作所)

文化財建築の魅力は多様な分野の工芸美術によって支えられている。その担い手確保や技術の承継には、国も独自の取り組みを見せる。石膏装飾は、そうした工芸美術の二つ。複雑ながらもシャープな表情を持つ石膏装飾の技術を探ろうと、業界の老舗、株式会社植野石膏模型製作所 専務取締役の植野守人氏を訪ねた。

**手** 元にA4判1枚のリストがある。タイトルは、「迎賓館赤坂離宮における工芸美術の技を受け継ぐ職人名簿」\*。「工芸美術」の欄には「手織り緞通」「紋ビロード」「石膏装飾」など9分野が並び、それぞれの分野の技を受け継ぐ職人の氏名や所属の会社名などが列記されている。その数は総勢59人になる。

リストを作成・公表したのは、迎賓館赤坂離宮改修工事の発注者である国土交通省だ。名前の公表によって建築の装飾等として用いられる工芸美術の技を受け継ぐ職人を顕彰し、工芸美術の魅力を広く発信する狙いだ。

取り組みの背景には、国宝に指定されている迎賓館赤坂離宮の改修工事に工芸美術の技が随所に必要であるにもかかわらず、その技を受け継ぐ職人の数が年々減少しているという事情がある。将来、担い手確保がままならなければ、改修工事に支障を来たしかねない。工芸美術という仕事に、やりがいを持つてもらうことが不可欠だ。

### 技術の核心は石こうの理解 一人前には、最低5〜8年

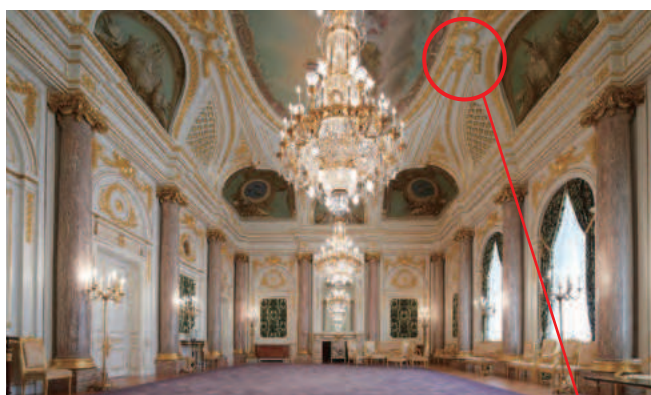
**「**うして名簿に名前が並ぶのは、ありがたいことです」。素直にそう喜ぶのは、石膏装飾を担当した職人の一人、植野守人氏だ。東京・新宿に本社を置く創業100年近い老舗の植野石膏模型製作所で専務取締役も務める。

同社で手掛ける石膏装飾とは、どのような技術なのか。

石こうという素材については、建

築界では石こうボードという製品でおなじみだろう。硫酸カルシウムを主成分とするもので、水と反応すると、硬化する。

石膏装飾では、建物内外を装飾する部材の原型を基に、シリコンで成型用の型をつくり、そこに石こうと水を流し込み、装飾部材をつくる。より安全性を確保する狙いで強度を高める必要がある場合は、石こうの代わりにガラス繊維強化石こう(GRG)を用いる。植野石膏模型製作所は内装仕上工事業者として、石こう製の装飾部材を建物にしっかりと固定する工事までを受け持つ。



国宝である迎賓館赤坂離宮で最も格式が高い部屋「朝日の間」。工芸美術の技が随所に見受けられる。拡大写真は植野石膏模型製作所が担当した石膏装飾(写真提供:迎賓館赤坂離宮)

\*「迎賓館赤坂離宮における工芸美術の技を受け継ぐ職人名簿」はこちらから  
<https://www.mlit.go.jp/gobuild/syokuninwotataeru.html>  
代表的な工芸美術の技や職人の声も掲載されている



同社が手掛けた案件で、もう一つの代表作がJR東京駅丸の内駅舎で復原された石膏装飾だ。南北ドーム3階以上の壁と天井には、干支やワシなどをモチーフとする多様な装飾が施されている。

ただ3階以上のため、地上からは距離がある。「細部までは明瞭に確認できないかもしれませんが、石膏装飾というものの雰囲気や味わってもらえれば幸いです」。植野氏は自負を見せる。

その技術の核心はどこにあるのか。植野氏はこう解説する。



東京駅丸の内駅舎南北ドーム内壁面と天井の石膏装飾は、設計図や現物がなく、資料や写真を基に復原した

**「**石こうという素材をどこまで深く理解しているか、という点に尽きます。石こうは種類が豊富で、硬化する速さも混ぜ合わせる水の温度や水素イオン濃度(pH)などによって異なります。扱いは簡単ではありません」

石こうの特性を理解し、それを一人前に扱えるようになるには、基本的な技術を持つている者でも、最低でも5〜8年かかるという。

「修業中は、現場に出す前にまず装飾部材の原型をつくる作業の手伝いをさせます。その後、既存の建物で使われている装飾部材の補修作業に従事させるという流れで、技術を習得させるようにしています」(植野氏)

### 石こうの良さを生かす建築で 触れる機会を増やし技術継承

**従** 業員は現在10人。高校や大学、専門学校を卒業して、石こうのことは全く知らないまま入社してきた人材で、白紙の状態から育成に取り組みなければならなかった。「どの現場に出しても恥ずかしくない」と胸を張る人材は、まだ限られます」と、植野氏は手厳しい。

文化財として価値を持つ建築の

補修工事という仕事への使命感は強い。「先人の遺したものを次代に継承するために、元の建物にどこまで忠実に補修できるか、という点を、私たちの使命として心掛けるように努めています」。植野氏は熱く語る。

ただ担い手の確保・育成はそう簡単ではない。将来の担い手候補として人材を採用しても、雇用し続けるには一定の仕事量を確保し続けなければならないからだ。人材を遊ばせておくほどの余裕は、どの企業もない時代だ。

いきおい、人員体制はぎりぎりの状態。「仕事量が多いときには、当社の従業員だけでは不足するため、これまでに築いてきた人的なネットワークを活用し、必要な人材を調達することで対応しています」(植野氏)。

できることなら、石こうの良さを生かせる芸術的なセンスを持つ建築設計者にもっと活躍してほしいと願う。石膏装飾の出番が増えれば、石こうに触れる機会がそれだけ増える。

「技術を伝える基本は、石こうにできるだけ多く触れて慣れてもらうこと」。植野氏の育成哲学を貫けるように、石膏装飾の利用の幅が広がるといい。



(写真提供:迎賓館赤坂離宮)

### 迎賓館赤坂離宮 一般公開のご案内

見学については、本館・庭園(主庭および前庭)は申し込み不要で、和風別館は事前予約が必要。ただし、原則水曜日は休館。そのほか急きょ外国からの賓客の接遇を行う場合や、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が発出された場合等、一般公開が中止になることがある。(令和3年(2021)3月現在)



<https://www.geihinkan.go.jp/akasaka/visit/>



うえの もりひと  
株式会社植野石膏模型製作所  
専務取締役